

AWGLCA6/AWGKP8 通信

Kiko

◆ボン◆

6月

11日

気候ネットワーク

〒604-8124 京都府京都市中京区高倉通四条上ル高倉ビル 305 Tel: 075-254-1011 / Fax: 075-254-1012
〒102-0083 東京都千代田区麹町2-7-3 半蔵門ウツビル 2F Tel: 03-3263-9210 / Fax: 03-3263-9463
E-mail: kyoto@kikonet.org (京都) tokyo@kikonet.org (東京) URL: http://www.kikonet.org/

気候ネットワークは、地球温暖化対策に取り組む市民のためのネットワークです。

「Kiko」は、温暖化問題の国際交渉の状況を伝えるための会期内、会場からの通信です。

日本の中期目標に、世界が 非難 国際 NGO、緊急記者会見を開催

交渉が後半に差しかかった2週目の6月10日、麻生首相が、中期目標についてスピーチを行ったとき、こちらボンは同日朝の11時頃。会議場では、条約LCAの非公式全体会で、交渉文書の第2読会を続けているところだった。そして麻生首相がスピーチを終えた直後の11時30分頃、会議場の日本政府代表団は、日本が2005年比15%削減とする2020年目標を選択したことを発表した。

国際 NGO はその1時間後に緊急記者会見を開催。麻生首相の発表内容を説明した後、WWF インターナショナルのキム・カースティン氏、オックスファム・バングラディッシュのムクタ・ジアルホック氏が、国際 NGO および途上国の視点から、日本の中期目標についてきわめて厳しい批判を浴びせた。

カースティン氏は、子供達の未来を考えるのであれば、2°C未満に気温を抑えるべきであり、日本に求められる削減からして極めて低すぎる、見直しされるべきとの指摘、またジアルホック氏は、地球温暖化によってもたらされる洪水等の深刻な被害の現状を語り、日本の大胆な行動の必要性を説き、はるかに高い目標を提案した。

その後、引き続き、通常は毎日夕方6時に開かれる「化石賞」のセレモニーを特別にここで実施、交渉の足を引っ張る

国に贈られる国として、世界のユースから華やかに、お弁当箱に入った山盛りの石炭が贈呈された。また、会見室では、2013年から8年間の極めて弱い次の目標を示した麻生氏は、まさに8年間温暖化対策をないがしろにしたブッシュの再来だと批判した「号外」が大量に配布された(写真)。麻生首相とブッシュ前大統領の顔を組み合わせた写真には、「二人って、実はすごく顔が似てる」との声も…。

記者会見には、世界からのジャーナリストのみならず、政府関係者、デブア条約事務局長の顔もみられた。

世界の市民社会の怒りがこみ上げた記者会見、「国民の負担がかかる」「単に野心的な目標を求めるだけなのは無責任」とした麻生氏による内向きの議論が、いかに世界の常識から大きく逸脱しているかが露呈された日であった。世界の反応は、温暖化の被害を確実に防ぐことのできないこのような弱い目標を出すことの方が、脆弱な国々、将来世代に対して「無責任」だ、という声だ。

号外では、「麻生に次期当選はありえるのか？」との疑問を投げかけている。

そう、秋の選挙だ。私たちが現麻生政権を評価するちょうどいい機会が待っている。



Adopt-A-Negotiator プロジェクト

COP15 に向け時がチクタクと迫りくる…tckctck.org という国際的キャンペーンの下、Adopt-A-Negotiator というプロジェクトが立ち上げられた。日・米・加・英・印など交渉のキーとなる10カ国から若者が集まり、各国交渉団の「追跡者」となって、交渉が自国及び世界にどのような影響を与えるのかを伝え、また政府交渉担当者には全世界が見ていると伝えるため、ブログ(www.adoptanegotiator.org)やfacebookなどwebネットワーク中心の情報発信をしている。世界中の人々が、国際交渉にふれる機会を増やし、交渉自体により影響を与えるよう、交渉の場と市民の橋渡しを目指すプロジェクトだ。日本からもぜひ注目したい。

一交渉ハイライター

「第2読会」の次はどうなる？

【条約 AWG/AWG-LCA】

議長「交渉文書」を土台に、2週目から第2読会が始まった。事前に各国に、修正文をメールで提出させ、それを反映した文書を示して、適切に反映されているかを確認する作業だ。各国の意見はこの場では聞かないため、ひたすら追加文書の確認作業を淡々と進めている。

木曜午前までに、適応・技術移転・資金を終えた。この作業を通じて、議長の交渉文書は、ふたたび膨らみつつある。

今回の会議は、残りの排出削減(緩和)、長期ビジョンの第2読会を終えたところで閉会するのがせいぜいだ。関係者はだんだん不安を募らせ始めた。その後どうなるのか？

LCA 議長に、それをもとに文書をしつ

かり作らせる作業を求めるのか、否か。そしてその後の第3読会は、8月の会合で行われるのか、それとも、次の改定交渉文書を使って、合意点を探り合う本格交渉に入るのか？まだ道筋は見えない。

先進国全体の削減幅の目安はたつのか？

【議定書 AWG/AWG-KP】

議定書 AWG では、4つあるコンタクトグループのうち、一番議論が集中しているのは、先進国全体および個別の削減目標を議論するコンタクトグループだ。

AOSIS は先週、各国のこれまでに発表した削減目標を積み上げた結果を発表したところ、2020年の削減量は5~11%

(LULUCF なし)程度にしかならないと発表。それを受け、条約事務局でもどの程度の削減レベルになるかを評価しようという試みが行われたが、その結果は明るみに出していない(下記の6/7のecoの

記事参照)。

各国の目標数値は、基準年が異なっていたり、吸収源や柔軟性メカニズムの扱いが異なっていたりと、単純な比較は難しいが、米国も入れて NGO が独自に試算をしてみると、90年比10%削減前後程度ではないかと考えられ、IPCC の25~40%の削減レベルには全く届きそうもない。途上国が先進国全体で少なくとも40%削減を求めると、各国が出した現時点の目標でもうオーケーということにもならない。数値の引き上げは必須だ。また、基準年や約束期間、どのようなクライテリアをもって目標を設定するかという点での議論も行われている。

それ以外では、吸収源(LULUCF)、排出量取引等の柔軟性メカニズム、温室効果ガスの種類に関する議論は終了している。

最終版の焦点はやはり、先進国の削減幅の議論がどう決着するかであろう。

本格交渉はいつから？

確か、昨年ボズナニ会議を終え、コペンハーゲンまで残り1年となって、2009年はいよいよ交渉モードに入る年、と位置付けられたように記憶している。

しかし気づけばもう6月。半年の時間が費やされたのに、ここでの交渉は、「交渉モード」と言うには余りに遠い。

確かに各国の政府関係者は、条約 AWG 議長に E-mail で追加文案を提出するために、毎日せっせと作業を進めている。しかしそれも交渉の土台となるテキストを作り上げる作業の域を超えない。そして、議定書 AWG の方は、先進国の義務だけを先に決めたくない先進国と、先進国の大胆な大幅削減を求める途上国との溝が埋まらない。どちらも歩み寄る姿勢が必要と言うしかないが、先進国からまず歩み寄ってはどうか。歴史的な責任があることも、今後さらに削減しなくてはならないことも、そして、途上国の適応や削減に大きな支援をしなくてはならないことも間違いのないのだから。

責任の押し付け合い (eco 6/7 号抄訳)

土曜日の AWG-KP 本会議では、附属書 I 国グループのメンバー各国が排出削減の責任をどうにかして互いに押し付けあうという状況であった。まったく驚くばかりである。

非公開で行われた非公式会議では、5月にあった数カ国からの提案に今回の会議でアイスランドから出た提案を加えた、検討しうる附属書 I の数量目標(QELROS)をまとめた紙を UNFCCC 事務局が用意し、締約国に配布した。

まだ目標を提示していない附属書 I 国、もしくは議定書批准を回避しているアメリカの排出量は入っていない。事務局が目標値をできるだけ良いものに見せたかったからという説もある。そこまでしても、数字は冴えない。

ロシアや、日本、米国、クロアチアの排出量、さらにはニュージーランドの牛からのメタンガスの排出量を含めないままでも、附属書 I の提案は、LULUCF を入れてマイナス16~24%の間、LULUCF 抜きではマイナス17~26%の間の範囲となっている。この数字は、IPCC が附属書 I 国に求める削減範囲マイナス25~40%をかなり下回るものである。これは、地球温暖化を2℃未満に確実に抑えるには40%以上の削減が必要であると言われているものからは、程遠いものである。

ECO は問わざるをえない：既に目標値を発表した国は、まだ発表していない国が残りの負担を引き受けてくれるとみなしているのか？合衆国やニュージーランドに対してほんとうのところ何を期待するのか？おそらく、目標値を設定するに際し、単純にどこか他の国がやってくれるだろうと想定したのかもしれない。それとも、これらの国は地球の温暖化がはるかに進んでも構わないと本気で思っているのだろうか。

その一方で小島嶼国連合(AOSIS)は、附属書 I の提案がどれほどお粗末かという文書を配布した。米国と、ロシア、日本、クロアチア、ニュージーランドの想定される目標値を付け加えてみると、2020年の野心に欠けた不面目な附属書 I 国の合計はLULUCF抜きで1990年比マイナス5~10%、LULUCFを入れれば1990年比マイナス6~13%になってしまう。

これが附属書 I 国の最大級の提案であるとすれば、誰もが知っているように地球は“天ぷら”になるのは科学が示すところである。

Kiko AWGLCA6/AWGKP8 通信 No.2

2009年6月11日発行

発行/編集 気候ネットワーク

青木えり、大久保ゆり、平田仁子、川阪京子、山田真紀子 携帯 49-162-330-3443 (平田)